

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞 應 寺
印刷所 東田印刷株式会社

新年の御挨拶

堂長 村上 徳 存

令和五年正月元旦

此日改歳令辰

謹伸嘉惊之儀

即日気雲極寒

恭惟尊候起居

万福多幸

皆様、無事、新年を迎えられて、慶祝に存じ上げます。

本年は癸卯、一般に言えば、卯の年、うさぎの年まわりです。温和で福德円満の年でありますように、お祈りいたします。

宗門には「密師白兔」の公案が伝わっています。

中国唐時代に洞山良价禅

師と兄弟弟子密師伯が行

脚・修行をしていると、途

中で白兔が道を横切った。

僧密は「俊なり」といい、「白

衣の相を拝するが如し」と

言った。それに対して、洞

山は「積代の簪纓暫時落薄

す」と言った。一は無官の

ものが宰相になったという

ので、向上を示し、一は高

貴の人が暫く、落魄したと

いうので向下を示す。――

中略――機に臨み時に応じ

て活作略をあらわしたもの

である。――中略――ただ変に処して向上もし却来もするところがあるが、この公案の見どころである（禅学大辞典）

洞山大師と密師伯が修行中に一匹の白兔を問題として出来た公案であるが、一つの事実を相対的観念を忘れて、とらわれることなく観察すれば、日々の行持を行持として修行することが大切である。

昨年五月に、先師一光方丈様の二十七回忌を永平寺小林監院老師を迎えて追善法要を厳修してまいりました。又、山内東堂にて退院療養せられておりました通元老和尚様が、七月二十五日夕刻に安祥と遷化せられ、九十七歳の御長命でございました。それに引続いて密葬、十一月一日日本葬儀。

永平寺の南澤禅師貌下を

乗炬大導師として迎請して

厳修せられた。副貫首老師

他永平寺顧問会の老師方、

宗侶、僧堂同安居会三百余

名大衆方、檀信徒他、二百余

名の多数の方々の参列を得

て、莊嚴裡に厳修せられた。

大多数の法縁の深い方々

で、療養中の御見舞や葬儀

の御礼も十分ではなかった

ことで御無礼の段、御海容

の程を、御願ひ申し上げます。

コロナ禍中と、宗務庁よ

りの僧堂改革は、宗門全体

の宗侶の少子化と、寺院後

継者、減少対策と相応して

喫緊の方策でしたが十月一

日発令で、瑞應寺僧堂の再

認可、堂長、堂監、監事の

任辞令を得て僧堂の再発足

となりました。檀信徒の皆

様には、格別の御支援を御

願ひ申し上げます。

令和五年元旦

耄懶老生風雪侵

(耄懶老生風雪侵す)

令和癸卯満園林

(令和癸卯満園林に満つ)

迎春偏禱大慈徳

(迎春偏えに禱る大慈の徳)

如是安然瑞応岑

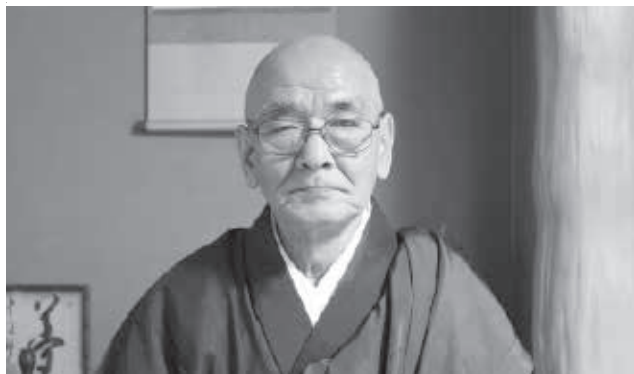
(如是安然瑞応の岑)

至禱至禱

本年もよろしく御願ひ申し

上げます。

合掌



汝は是れ慧超

―目は横に鼻は真つ直ぐ―

後堂 門原 信典



新しい年を迎え、本年も皆様方の身心のご安寧をお祈り申し上げます。

中国の唐の終わりに北宋にかけて禅宗は大いに発展し、五家七宗に分かれますが、これらは宗風、切り口が異なるだけで、坐禅が修行の中心に違いはありません。その中に法眼文益禪師（八五〇～九五八）が開祖の法眼宗があります。

その宗風をあらわす法眼禪師の問答に「慧超問佛（慧超が佛を問う）」というお話があります。

慧超はのちに法眼禪師の法を嗣ぐ帰宗策真法施禪師の幼名です。

慧超が法眼禪師に「私は慧超というものですが、佛とは一体何でしょうか？」と問います。法眼禪師は間髪いれず「汝はこれ慧超」と答えられます。

「慧超が慧超している事が佛だ」と尋ねているお前さんこそ佛ではないか。お前を置いて他に佛は無いぞ」と示されるのです。

曹洞宗の寺院では晋山結制と云う新住職の就任式があり、新住職

はご本尊様の前、須弥壇に上り問答を受けます。

かわい小僧さんが、教えられたままに「いかなるかこれ佛」と問いて出て「あなたが佛様です」と答えられ「吉祥吉祥大吉祥」と大きな声で退き、法要の緊張がほぐれる微笑ましい一コマです。

しかし、この慧超の「如何なるかこれ佛」という問いは、ギリギリの問い。それまでの葛藤、人知れず悩み抜き、骨を削り、血を流すほどの艱難辛苦の末に、ようやく絞り出すように生まれた問い。

ですから「汝は是れ慧超」の一言で慧超は真実の自己に目覚めるのです。

道元禪師は二十四歳（二三三年）の時、中国（南宋）に留学します。各地の道場を巡り二十六歳の春中国曹洞宗の流れをくむ如浄禪師に相見され、お釈迦様から連綿と伝えられた佛法を相続されます。そして二十八歳で帰朝、三十四歳（二二三年）の時に宇治の興聖寺にて最初の僧堂を開かれました。

道元禪師が臨終の前に、如浄禪師との出会いを「人身を受け、佛法に遭い、正師の教えにより正法を聞き、正信をとり、邪見に陥らざる、今生の幸いなり」とお示しです。

その正師である如浄禪師から受け継がれた正信とは何か、興聖寺での御法語に「只是、等閑に天童先師如浄禪師に見えて、当下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞ぜられず。便及、空手還郷す、所以に「毫も佛法無し、任運にしばらく時を延ぶ。朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。雲収まつて山骨露れ、雨過ぎて四山低る。畢竟如何。良久していわく。三年、一閏に逢い、鶏は五更に向つて啼く」とお示しです。

当時中国に禅の道場は沢山ある中で、如浄禪師に出会えたことは、真に千載一隅の出来事。等閑とは任運、無意識。人と人との出会いは全て自分の小さな計らいを超えています。

そして同時に自分ではどうする事も出来ない私の真実が「眼横鼻直」でした。当下、その場でただちに自分の思惑を超えた自分自身の生命の尊さに気づかれるのです。認得は、見て取る、はつきり見る。見極める。見定める。

「眼横鼻直」こそが私自身の比べようのない真実の姿であると確信する。私の真実を他に探さなくて

も良いのです。

「慧超は「慧超を実践するのみ。」「私がこの身心で佛法を行ずる以外に無い」何故なら私自身が佛だったから。それは誰かに欺かれたことでもなく、是こそはと受け取ったものでもない。ただ私が等閑に認得しただけ。だから何も手に携えずに日本に帰ってきた。

空手還郷は、自分が佛様の自分に落ち着く。自分、幼い自分に帰る。それが私の安心。所以に一毫二筋の毛も佛法無し。」「如何なるかこれ佛」と持ち出した、探し出す特殊なものは一筋の毛ほども無かつたのです。

自然のままにこの身心を任せて見ると、毎朝太陽は東から昇り西に沈む、月も東から西に沈んでいく。風に流されるままに雲が去っていくと、山谷のざわめきも静まり山肌が生きて生きた露われ、雨が止むとその山々は更に輝きを増して一層身近に迫ってくる。

雲にさえぎられて見えなかつたが、山はそこにあつた。しかも雨をいただいて益々生き生きとしていた。雲が去って山が現れたように、もともと私はここに居たのだ。私の真実も尊さも今ここに有るのだ。

如浄禪師より身心脱落の証明をいただき、私が御佛様の生命そのものだと思われられたのです。如浄禪師の慈しみに満ちた法雨は

道元禪師の身心に染み渡ります。

ただ、なんの計らいも無く「任運に且く時を延ぶ」生命の真実の働きに、この身心をゆだねるのみだったのでした。

「等閑」と云う言葉こそ、生き生きとした、私を超えた真実の言葉。大自然の何の変哲も無い姿。これこそが無心、無念無相。

畢竟如何、真の事実、行き着くところはこれのとおり。

しばし沈黙の後また示された。三年に一度閏年が巡り来る、(旧暦の閏年は三年に一回)鶏は明け方に五更の時を知らせる。

この三年という時間も、閏年も、五更という時の単位も、鶏が時を告げているということも、真実の世界の中で、生命が生きて働いている姿、御佛様の世界で御佛様の修行が実践できる。

禅の歴史を見れば、遙か五千年の前からヨーガの修行として禅の形は実践されていきました。それは身心を調えることが人類誕生と同時に永遠の命題としてあつたからです。そしてお釈迦様、達磨大師、道元禪師と伝わり、ただ身心を調える事が人としての大自然の営みであり、み佛様の姿として、私達は今こうして衆生済度の坐禅を勤めさせていたのだのみです。

「如何なるかこれ佛」本年も同行同修よろしくお願ひ申し上げます。 合掌

頌 春

監録 金岡 潔宗



福寿無量 萬福多幸

新年明けましておめでとうございます。

皆さんは、どのようなお正月をお迎えでしょうか。

私は、昨年七月二十五日に本師大慈通元大和尚が遷化され、去年のお正月は、「挨拶をし」ありがとう。ありがとう」とおっしゃったことを思い出しながら新年を迎えています。

本師は、お正月の朝参で毎年必ず橋本恵光老師のお話をされていました。

『ある年の年賀の拝の時、橋本老師が「本師には、挨拶に行くのか」と訊ねられ「郵便で送ります」と答えると「何を考えとるんじや。広島ならいけるだろう。ちゃんと顔を見て挨拶するもんじや」といわれ直ぐに挨拶に行った」との話をされ「いいか、本師には、ちゃんと顔を見

て挨拶をしなきゃいかん。自分が今、こうして居ることに感謝せないかん」といつも大衆（修行僧）に話されていました。

宗門（曹洞宗）には、年頭に当たり壽餅（じゆびやう）を贈るという礼法があります。

宗門寺院の師弟は、受業師（得度の師僧・法幢師（ほうとうし）（立職の師僧）・本師（伝法の師僧）・参学師（自分が法恩を被った老古仏）に対し正月三朝に、重ね餅を供え師僧の法身堅固福寿無量を祈願し、年頭に拝登し奉呈する慣例があります。

毎年本師には、全国から沢山の壽餅が届いております。

受業師・法幢師・本師・参学師に対し壽餅を贈るということは、それぞれ自分を育ててくださった師僧の法身堅固福寿無量を祈念することは勿論、師弟にとっては、自分自身の道心を精励する大事なことであります。

私はもう一度、本師に壽餅を食べて頂きたかったとつくづく思っております。

さて、餅といえば、正法眼蔵に画餅（がびやう）の巻があり、香巖智閑（かうげんちかん）師（唐の時代の祖師）の「画餅は飢えに充てず」の語が取り上げられています。この故事は「正法眼蔵溪声山色」に紹介されています。

香巖智閑（かうげんちかん）師が、大瀧大円（だいだいえん）禅師のもとで修行していた時「書物からの引用ではなく、父母（ぼふ）未生（みしょう）以前（いぜん）において一句道取（いっくどうしゆ）してみよ」と問われます。香巖（かうげん）禅師は、どのように説くべきか何度も試みるのですが言えないまま時が過ぎます。

それまで貯えた書籍を開き見たが、解らず茫然とし、書物を焼いて言われます。「画に書いた餅は、飢えを救うことはない。

私はこの生のうちに仏法を会得することを望まない。ただ食事給仕係（きよけい）となろう」と言って年月を過ごしたのです。そして師に「私は身心昏昧（こんまい）して説くことが出来ません。どうか私のために一句言ってください」と。大瀧（だいだい）禅師は言われます「言ってもいいが、そうすると後で私を恨むであろう」と。こうして年月を過ごし、山に入り、草庵（そうあん）を作り、竹を植えて友とし独坐（どくざ）されていきました。あるとき道を掃いていて、瓦（かわ）がはねて竹に当たり、カッーンと音がします。その時、豁然（かつぜん）として大悟され、師のいる大瀧山（だいだい）に向かつて焼香（しやうかう）礼拝（らいはい）して「大瀧和尚、昔言ってくださいだったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」

むであろう」と。こうして年月を過ごし、山に入り、草庵（そうあん）を作り、竹を植えて友とし独坐（どくざ）されていきました。あるとき道を掃いていて、瓦（かわ）がはねて竹に当たり、カッーンと音がします。その時、豁然（かつぜん）として大悟され、師のいる大瀧山（だいだい）に向かつて焼香（しやうかう）礼拝（らいはい）して「大瀧和尚、昔言ってくださいだったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」そして偈（ぎ）を作ったでしやうか」

「香巖（かうげん）撃竹（げきちく）」あるいは「香巖（かうげん）聞（もん）声悟道（しやうこどう）」といわれる故事です。ですから「画餅（がびやう）不充飢（ふちゆうき）」の語は、もともと書物を読んで得た知識は画餅（がびやう）であって飢えを充たせない、ということですが、道元（だうげん）禅師は「画餅（がびやう）」の巻で否定されています。

ない、ということですが、道元（だうげん）禅師は「画餅（がびやう）」の巻で否定されています。

「画餅（がびやう）不充飢（ふちゆうき）」つまりこの「不充飢（ふちゆうき）」こそ真実の姿という真の意味を知る者は全くいないと、さらに「この世の中の実態（じたい）というものは、一面的に考えて学問（がくもん）の意味がないということも言えないし、また学問（がくもん）さえ知っていればいいというわけでもない」と。

すなわち道元（だうげん）禅師は、学問（がくもん）を学ぶと同時に坐禅（ざぜん）をすること、そこに仏の世界（ぶつのかい）を実現（じつげん）することを説かれています。

年頭に当たりさらに精進（しやうじん）したいものです。 合掌



聖護寺秋季法要



山門



首座寮



成道会 ひかり幼稚園児お参り

謹賀新年

令和五年 癸卯

元正啓祚
萬物咸新

本堂 法堂

佛國山瑞應寺
住職 村上 徳存
副住職 金岡 潔宗

寺選総代
河端 宏一
住友金属鉱山株式会社
総務センター長

地区総代

一区 三浦 廣志
二区 本田 龍朗
三区 大條 雅久
四区 曾我部英敏
五区 本田 康忠
六区 村上 義幸
七区 篠原 元久
八区 伊藤 数義
九区 藤田 理
十区 鴻上紳一郎

瑞應寺専門僧堂

堂長 村上 徳存
西堂 宮田 玄洞
堂監 門原 信典
監事 阿部 信宏

瑞應寺護持会
会長 大條 雅久
学校法人ひかり幼稚園
同 保護者会



乳粥供養

年頭所感

「叢林が基本だ」

とおっしゃられた東堂老師が、その言葉そのままに遷化されました。

三十八年ほど前のある日、老師の頭髪をそっておりましたら「お前はのんびりしとるの、お前のようなのは長生きできるが、わしのような者は長生きできん。」と言われました。

九十七歳。もつと長生きしてはしかったです。叱られる度ごとに親しみが深くなりました。お姿に接することができるだけで仕合わせでした。

「叢林が基本だ」のお言葉を忘れることなく本年も精進致します。

講師 越海 暢芳

このたび、侍聖をつとめさせていただくこととなりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

僧侶を志し、瑞應寺様にて修行させていただきましたのは、もう三十年ほども前のことになりました。厳しくも温かき先輩方や仲間たちとの日々が、長い年月の間にも常に私を支えてくれていたように思います。自坊に戻り副住職をつとめるうちに、己の至らぬ点に思い悩むことも多く、また昨年には病を得て、限りある自分の命を精一

杯生きよう、私を支えてくださったすべてに、できる限りのご恩返しをしたいと今更ながら強く思うようになりました。このようなタイミングで、今一度有難きご縁をいただきましたことに心より感謝申し上げます。一生懸命おつとめさせていただきます。ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

侍聖 山本 兼照

昨年は当山東堂栖崎通元老師がご遷化され、三日後の密葬儀、百ヶ日に本葬儀と、慌ただしい年でした。

悼栖崎通元大和尚遷化

威儀卓説挙功名

小體禪翁大法成

轉錫悠々遷化去

猶留敬祖愛山情

私の知る老師は七十歳代以後ですが、外には助化や布教に東奔西走、山内では声明や祈祷太鼓、書画に提唱等々、雲水衆薫育の歳月を送られました。

あの小さなお體の何処に力を備えておられるのか、不思議に思うほどでした。

お體が衰えたここ数年間は、祖師方への敬仰の念を殊更にされ、感謝のお言葉が増えていたように思います。

最後まで瑞應寺のことを想われた愛山の情は、なお此処に留まり、我々の行持を見守ってくださいているものと信じています。

監事 阿部 信宏

昨夏に恩師と慕する御老師がお二人続いてご遷化なされた。学浅く行至らぬ私ではありますが、お目にかかる時々にお声がけ下さった時のやさしい佇まいが励みになりました。

いつも会うたびに「勉強していますか?」と明るく声を掛けて下さる法友がいる。なかなか怠け心の抜けない私を気付かせて下さる大事な言葉だ。

私にとつて励ましとなる佇まいや言葉は、私を思つて下さる気持ちをまっすぐに感じ取ることが出来るからだろうか。

私も誰かにとつての励ましとなるような佇まいや言葉が身につくように、恩師や法友の生き方を見習いたい。

知客 家古 谷光祥

昨年までは、自身のお寺や身の回りが煩雑だったので、この道場に拝登しても、法益の時間にお話をさせて戴くことは多いのですが、いろいろな行持の進退の作法や声明などが、以前道場に常在していたころの様に上手く出来ず。雲納さんや他の役寮さん方についていくのがやっとであるといった感じでした。

今年からは、改めて上山する気持ちで、道場に在山できる時間を増やしていき、今一度、坐臥に拘わらない処の修行を雲納さん方と共に意識的に実践していきたいです。

維那 吉松 聖博

行履の事

新年明けましておめでとうございます。

この新年が皆様にとりまして良き年でありますことを心より祈念しております。

中々秋を感じないと思つていましたが、臘八摂心を迎えるとやはり寒くなりました。

年が明けて思いますのは、今年もよい年でありますように。私の行履とはやはり、

「參禪の人、且れ半途にして始めて得。全途なるも辞むること莫れ。祈祷祈祷。」 副典 足立 光顯

新年あけましておめでとうございます。桃花春風に笑むといいますが、世の中は様々に変化いたしました。花は変わらず春の風が吹けば毎年同じように花を咲かせます。

コロナウィルスの流行や戦争など世相はかならずしも安穩としたものとはいえませんが、今年もありがたくも新春を迎えることができました。かけがえのない、なにげない毎日に感謝できますよう、おこらず日々精進して参りたい所存です。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

侍者 村上 徳樹

門松は 冥土の旅の 一里塚

めでたくもあり めでたくもなし

とんちで有名な一休和尚様の詠まれたお歌だと伝わっております。毎年、門松を飾ることに一つ一

つ歳をとり、黄泉が近づいている。自分の体の変化もありますが、昨年はお世話になった方々が亡くなられ、特にこのことを痛感いたしました。

十年前くらいに悲観的な思いが頭を離れなくなり先住の通元方丈様に、このお歌についてお尋ねしたことがあります。

その時に通元方丈様は「めでたいときはめでたいといつておけばええ。」とひとことお示しくださいました。

当時はよくわかりませんでした。が、今思うと、先のことを悲観しすぎて目の前にあるご縁を疎かにするんじゃないぞ、とお示しいただいたのだと受け止めております。今ここにあるご縁を疎かにしないよう、今年一年また気を引き締めてまいりたいと思います。

副悦 古川 承久

明けましておめでとうございます。今年で五十歳になりました。

三十三歳のとき、初めて日本に来た日に感じた高揚感をいまだ鮮明に覚えています。もう十七年という月日が流れました。

『論語』には孔子が晩年になって自分の一生を回想しながら、その人間の形成の過程を述べたことがあります。

「私は十五歳のとき学問に志し、三十歳になって自立し、四十歳には心に惑うことなく、

五十歳にして天命を知る…（為政）と。

この言葉に自分の人生を照らしめてみても、なるほどとこのことの深さを感じています。

遅れて始まった学問ですが、三十三歳には一人単身で日本に渡って仏教学を目指しました。そして学業は自足（立）するに至り、四十歳になってからは、さらに仏門の世界に入って十年、思い通りにはいかない現実的な悩み苦しみはありましたが、初発心を忘れることなく（心に惑うことなく）学習して来ました。

そして今五十歳を迎えました。孔子は「天命を知る」と表現しましたが、「天命」ということは何の様に理解するかは様々だと思えますが、仏教の見解からいえば、「見道」すなわち悟りの境地ではないかと思われまます。故に、「天命を知ること」といふ言葉は、変えていえば人生五十ぐらいになることは悟りを得ないといけないことでしょうか。禅家でも悟りの境地を偶煩をもつて表現することもあります。が、宗門では「即心是仏」身体を持って行う坐禅そのものが悟りであるというので、これからも坐禅だけは怠らないように今年も精進していきます。

蔵司 金範松

新任で配役をいただいた、今年の二月。しっかり指導せねば、と

息巻いていたのが恥ずかしい。むしろ雲水さんから教わり、雲水さんに気づかされることばかりで、自分自身の学びを嬉しく思いながらも、役に適っていないことへ焦りが募る日々でした。そのような時、先輩役寮さんの「自分ができるところを一生懸命やるしかない。」という言葉に救われました。

知殿 三宅俊尚

新年明けましておめでとうござい

ます。修証義に「愛語」という言葉が出てまいります。「愛語」といふは衆生をみるにまず慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。」これは、愛語というのは、人々に対して慈しみ愛する心をおこし、愛情に満ちたことばを語ることと訳すことができます。私は僧侶として、沢山の方々との日々のお会いを大切に、「愛語」のある心を持って相手に尊重し相手を思いやる僧侶になりたいと思っております。愛語を実践し、出会う人も笑顔になれるように笑顔の絶えない一年にしたいと思

直録 楠本剛大

入堂して二ヶ月が過ぎようとしております。

修行に励んでいるつもりでも、

何事もなかなか身につかず失敗続きですが、役寮の和尚様方、古参

和尚さんに辛抱強く助けて頂いております。まだまだ制中は続きませんが、自分に甘える事なく、怠ける事なく精進していきたいと思

首座 康稔

瑞應寺で迎えた二度目の冬。

古参になれば余裕が生まれると思ったが、私の苦手な新到和尚さんへの指導が待っていた。自分の行動・背中を見せ続けるべきか、口酸っぱく口宣を入れ続けるべきなのか。何が正解か分からない毎日。相手を思う心だけは忘れずに指導していかなければならないと思

書記 慧岳

思い通りになる修行はないのだと日々実感させられる。一日一日を大切に精進していこう。

新年あけましておめでとうございます。昨年十一月に入堂させていただきました。総てが目新しい事ばかりで、言葉の一つ一つが耳に新しいため、まるで異国での生活が始まったごとく失敗の連続の日々。役寮さん、古参和尚さんの方々にご迷惑ばかりかけております。還暦を迎える今年檀信徒の方々と共に成長できる和尚になるべく威儀を正し、小さな事から、「仏法・僧の為に」を念頭に精進して参りたいと存じます。

辦事 智之

禪のたより

テレホン法話（〇八九七 四一・〇〇三三）



◆ 除夜の鐘

今年も残すところわずかととなり、皆さんは、この一年を振り返り、何を思いますか。大晦日は、これで今年も終わるかと思うと感慨深いものがあります。

大晦日も元旦も、今日と同じ一日です。

しかし、心では特別な日です。旧年と新年の年の変わる時間に除夜の鐘を撞きます。

除夜の鐘を撞くのは、一〇八の煩惱を取り除き清らかな心で新しい年を迎えるためです。

煩惱とは、私たちの身心を苦しめ煩わす心の動きのことですが、そのもとには、「貪欲・瞋恚・愚痴」の三つの煩惱が心を惑わせるのです。こんな話があります。

九歳で出家したラーフラは、いつも元気に飛び廻ったり、時々たわいもない悪戯をしていました。お釈迦様はそれを聞き、ある日ラーフラを尋ねました。

お釈迦様は、足を洗う水を持ってくるよう言いました。ラーフラは、たらいに水を汲みお釈迦様の足元に置きました。足を洗ったお釈迦様は「この水は飲めるか」と尋ねました。ラーフラは、「この水は、初め清らかだったが、足を洗ったので飲めなくなりました」と答える

と「ではどうしたらよいか」とお釈迦様は尋ねると、「捨てるしかない」と。お釈迦様は「お前もこの水とおなじだよ」と言われました。

人はみな清らかな心で生まれてくるが、大きくなるにしたがって、世の中の色んな垢に染まり、心が汚れてしまい、この水の様に捨ててしまわなければならない。と言うのです。そしてお釈迦様は、その水を捨てさせました。水は大地の中へ入ってしまいました。もう二度と戻りません。

お釈迦様は、「この水と同じで前に行った行為も二度と戻らない」と諭されました。

そしてラーフラは、心から懺悔したのです。

私たちは、知らないうちに、貪り、いかり、愚痴により心が汚れます。そのため懺悔文『われむかしよりつくれるもろもろの悪業は、みな無始の貪瞋痴によりて、身と口と意よりのうみものなり。いっさいわれいま懺悔したてまつる』をお唱えし、二度と同じ過ちを起こさないよう悔い改め心清らかにします。

今年の大晦日は、除夜の鐘を聞きながら一年を振り返り、自分の行いを悔い改め、新しい年を清らかな心で迎えますよう。

合掌

瑞應寺専門僧堂監録 金岡 潔宗
令和四年十二月一日〜十日



■臘八摂心

釈尊成道の聖日を因み、十二月一日(木)より八日(木)暁天まで、恒例の臘八摂心を修行。会中は、門原後堂(東印請祖)越海講師(正法眼蔵)吉松維那(普勸坐禅儀)金蔵司(般若心経)の提唱を拝聴。会中の供養施主に深謝。

令和四年臘八摂心

供養施主(順不同)

当 山 総代会 殿
愛媛県 正覺寺 殿
香川県 南隆寺 殿
愛知県 森川法雲 殿
愛媛県 義安寺 殿
岡山県 東林寺 殿
愛媛県 禅興寺 殿
岡山県 中興寺 殿
広島県 長福寺 殿
鳥取県 玉泉寺 殿
当 山 梅花講 殿
愛媛県 田中淑恵 殿
兵庫県 鶴我昌三 殿

■成道会・断臂摂心

十二月八日(木)臘八摂心大開静、堂内朝課に引き続き成道会献粥諷経(門原後堂)、小参(門原後堂)。行鉢は乳粥謹喫。午前、当山梅花講員

他、野菜、果物、菓子等多数頂戴。
愛媛県 少林寺 殿
愛媛県 宝泉寺 殿
島根県 雲松寺 殿
茨城県 孝顕寺 殿
愛媛県 鶴川文男 殿
愛媛県 小野 巧 殿
他、野菜、果物、菓子等多数頂戴。



成道会



小参



による詠讃歌の中、成道会正當諷経を厳修。
九日(金)、震旦二祖慧可大師断臂報恩の一夜摂心。越海講師「正法眼蔵」の提唱を拝聴。翌朝四時覚眠、暁天只管打坐。続いて二祖忌献粥諷経、二祖忌正當諷経を厳修。

十二月の日鑑

一月の予定

一日	祝禱	臘八摂心(八日迄)
二日	日曜参禅会	成道会
三日	断臂摂心(十日迄)	震旦二祖忌
四日	祝禱・略布薩	観音講・勉強会
五日	餅つき	合同慰霊祭
六日	略布薩・除夜	
七日	大般若祝禱諷経	歳朝人事・年賀ノ拜
八日	角野消防団初祈禱	寿餅ノ拜
九日	年頭総代会	おねはん受付開始
十日	日曜参禅会	祝禱・略布薩
十一日	観音講・勉強会	寒行托鉢(廿日迄)
十二日	法戦式	略布薩

◇訂正のお願い

《令和四年十二月号》

P1 御法語

○ 冀 尚亨

訂正並びにお詫び申し上げます。

銀杏感謝録

愛媛県 法眼寺 殿	愛媛県 観音寺 殿	愛媛県 運西寺 殿	愛媛県 佐藤ふみえ 殿	愛媛県 昌福寺 殿	オーストラリア 直証庵 殿	愛媛県 善光寺 殿	愛媛県 大雄寺 殿	福井県 曹源寺 殿	広島県 宗光寺 殿	徳島県 黒松寺 殿	山口県 日天寺 殿	静岡県 龍泉院 殿	静岡県 瑞泉寺 殿	静岡県 永明寺 殿	秋田県 雲巖寺 殿
-----------	-----------	-----------	-------------	-----------	---------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

(令和四年十月三十一日受付迄)



鐘 声

瑞應寺専門僧堂に安居して二ヶ月、間もなく冬が訪れようとしています。瑞應寺の冬は厳しいと聞いていますが、暖かい衣服を送ってくれる家族や、季節に負けず厳しい修行の中で、周りの方々から頂ける様々な暖かい指導、心遣いで、挫ける事なく晴れやかな春を迎えたいと思います。

今冬首座